

長岡京跡左京第532次調査地元説明会資料

財団法人向日市埋蔵文化財センター

所在地	向日市森本町四ノ坪33-6の一部
推定地	左京一条二坊七町
調査期間	平成21(2009)年11月16日～平成21年12月11日(予定)
調査機関	財団法人向日市埋蔵文化財センター
所管	向日市教育委員会

1 はじめに

調査地は、784～794年の都である長岡京跡の左京一条二坊七町中央部に推定されます。都の中心部である大極殿だいくでんの北東約900mに位置し、京内の役所や邸宅が置かれたと考えられています。七町域は南西50mで左京第355次調査が行われていますが、当時どのような土地利用であったか不明でした。そこで、今回は、宅地内の利用状況を明らかにする目的で調査を行いました。

2 発見された遺構

約1.6mの現代盛土を掘り下げると、現代の耕作土と床土が現れ、この地層の直下に黄色を帯びた灰色の土が分布していました。丁寧に地層分布を調べると、土の色や質の異なる部分があり、昔の人が掘った痕跡(遺構)とわかりました。さらに検討を進めると、長岡京期(784～794年)の掘立柱建物2棟、鎌倉時代(13世紀)の穴1基、近世～近代の耕作溝10条、穴1基が残っていることがわかりました。

長岡京期の建物1は、柱穴が一辺80cmの掘り方(柱を埋めた穴)に、径25cmの円い柱痕を残します。柱穴は東西に3基並び、柱と柱の間隔(柱間)は3mです。建物の南辺と考えられます。宅地の中央部に近く、柱も大きいことから、中心的建物(主屋か副屋)の一部と推定されます。建物2は2.4m間隔の柱列です。一辺50cmと、建物1と比べ小さいので、仮設の小規模な建物でしょう。

鎌倉時代の穴は、当時の食器である瓦器が出土しました。ゴミ捨て穴でしょうか。近世～近代の溝は、過去の調査例から、耕作に伴う畝溝と考えられます。

3 まとめ

今回の調査成果は、長岡京期の建物を確認したこと、以降の土地利用を明らかにしたこととの2点に整理できます。特に注目されるのは、長岡京期の建物1です。柱間が3.0mを測る大形建物とみられます。同様の柱間をもつ建物は、過去、長岡京跡で54例発見されており、役所や天皇の離宮、貴族の邸宅の中心建物として利用されています。今回の建物が具体的にどのような性格の施設であるかは不明ですが、七町が中心部に大形建物を配置する重要な宅地であることが明確になった点は重要な成果です。

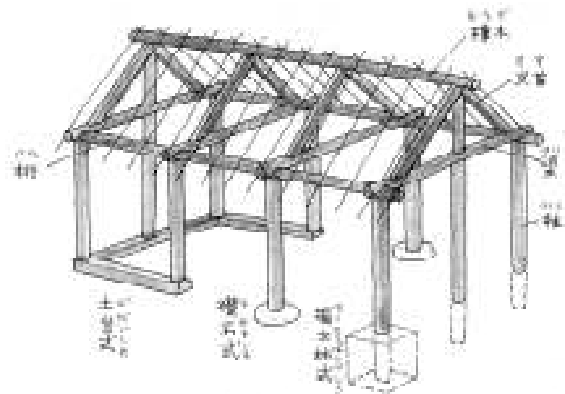


図1 古代の建物構造模式図
(宮本長二郎『平城京』1994年より引用)



図3 左京一条二坊七町Iの位置関係

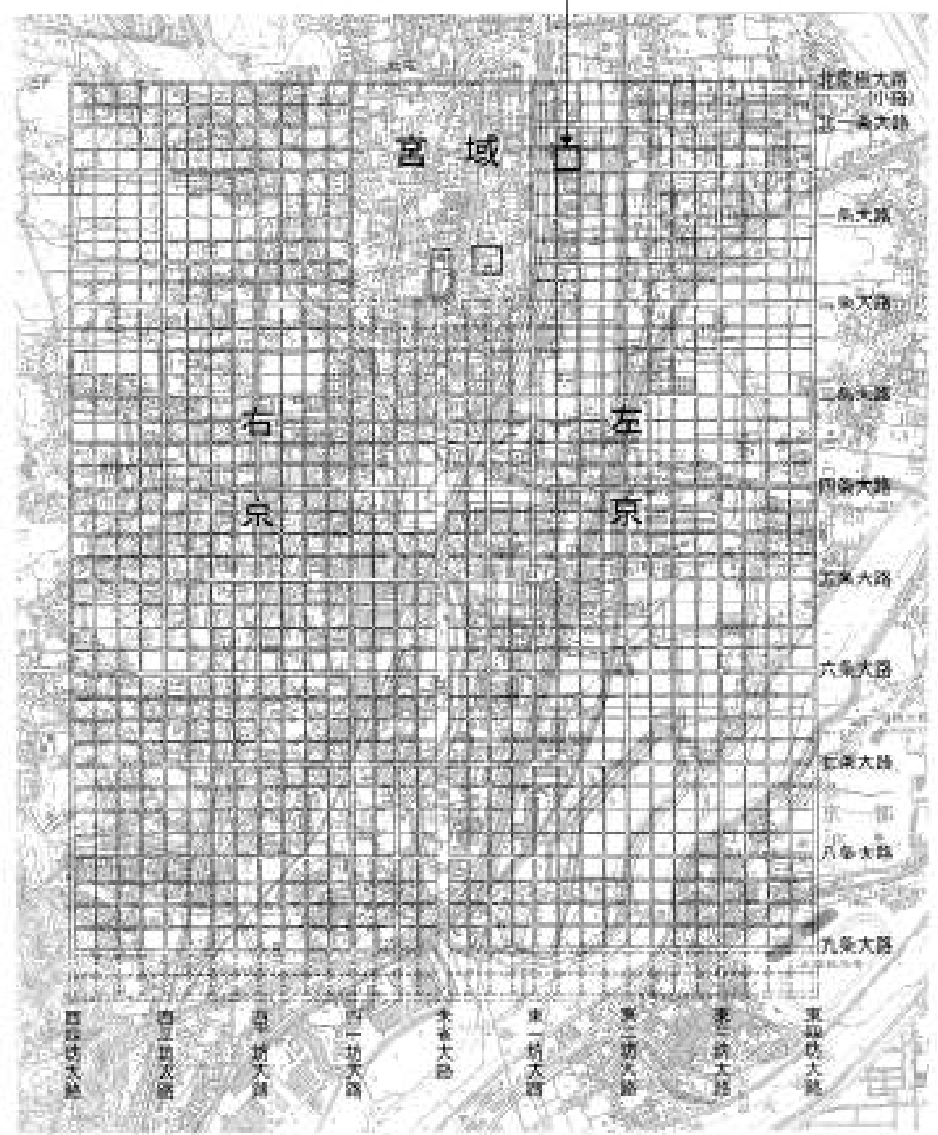


図2 長岡京跡における調査地の位置

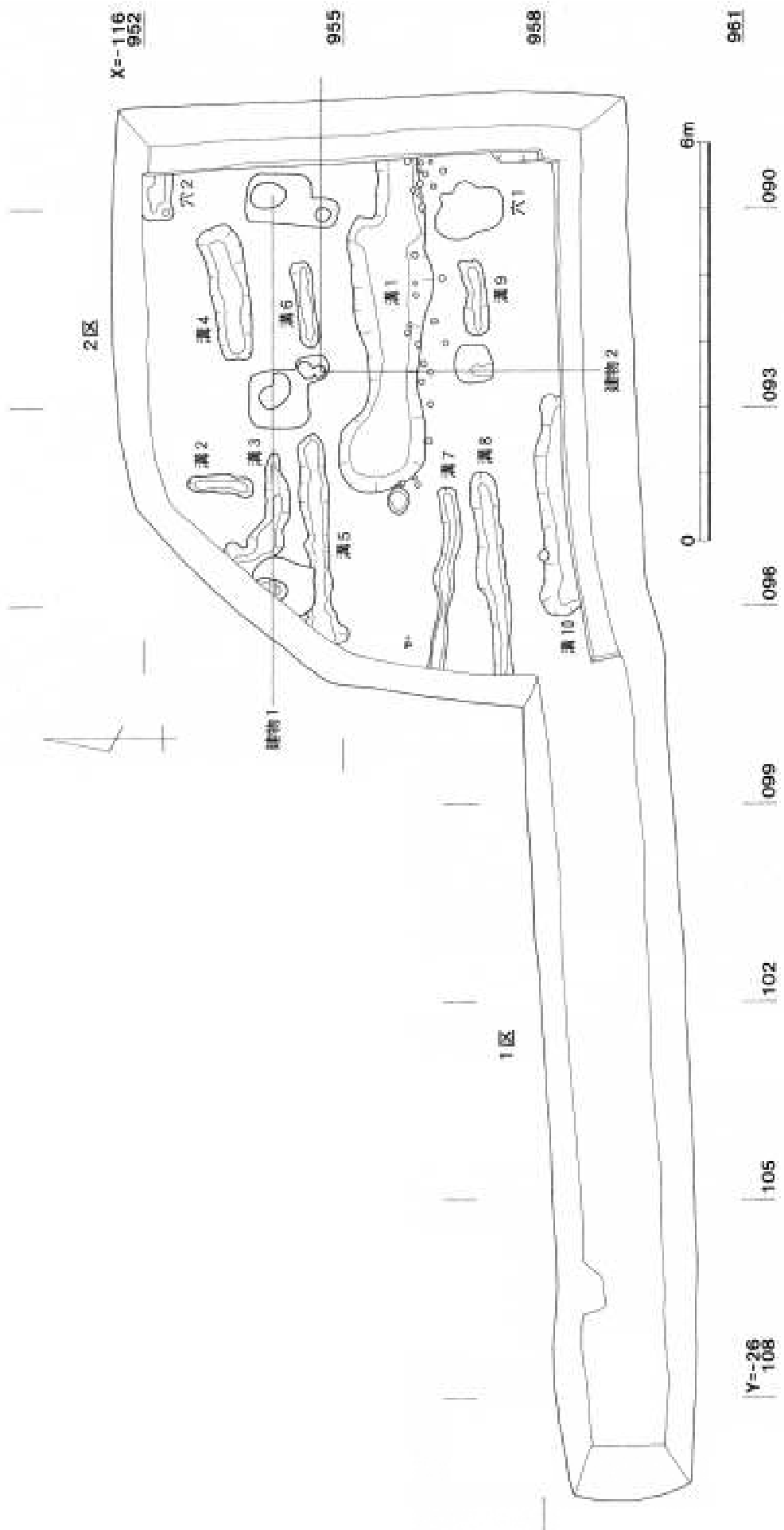


図4 発見された遺構平面図